

原口長之先生遺徳展



考古学者 原口長之の真骨頂は、
終始変わらぬ温かい教育者であるということである。
その庶民的な謙虚な人柄が幅広い共感を生み、
その共鳴がエネルギーとなって、
前人未踏の文化財愛護の実践を可能にしたのであろう。

(田邊 哲夫)

「原口長之先生遺徳展」

■後期企画展

「原口長之先生遺徳展」

平成七年十一月三日～平成七年十一月三日

戦後の熊本県考古学界及び文化財保護行政の発展に多くの発掘品、論文、報告書、書籍、当時の写真等を通して業績を紹介します。

企画展開催にあたつて

当熊本県立装飾古墳館も平成四年の開館以来四年目を迎え、すでに二十二万人のお客様において頂いております。

さて、当館では、平成七年度後期企画展として「原口長之先生遺徳展」を開催することにいたしました。先生は、館の設置準備室時代より尽力され、設置後は当館初代館長として、百年の基礎づくりに邁進されて来られました。

その後、平成六年五月からは当館名譽館長に就任され、末長くご指導を頂く事になつておりました。ところが、先生が手掛けられた実習棟の竣工を目前にした同年九月十一日、病のため急逝されました。実習棟の新設に全力を傾注されていた先生の心情を思うとき、誠に忍び難いものがあります。教育者として、考古学者として、郷土史家、文化人として、先生の素顔は多岐に亘っております。

先生の逝去から早一年、一周忌を迎えた今秋、この企画展が、先生のご生前の遺徳とご功績を偲ぶよすがとなれば幸いです。

企画展に当たりましては、快く各種の資料の提供を頂きましたご遺族様、また関係各位の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成七年十一月三日

熊本県立装飾古墳館・館長 中島武治



原口長之先生遺影

(平成2年11月 国武旭範氏提供)

目 次

○企画展開催にあたって 館長 中島武治	五、山鹿高校考古学部顧問時代の活動：原口長之・隈 昭志 19
○口絵・原口長之先生遺影	—調査項目と当時の部員一覧—
○目次	
一、原口長之先生遺徳展の構成 副館長 桑原憲彰 1	六、原口長之先生著作・論文一覧 松本健郎
おいたちの記	七、最後の論文 装飾古墳館前館長 原口長之 29
山鹿高校考古学部の創設	八、名譽館長就任と晩年
二、高校から県教育庁指導主事へ	(8) 舟葬説についての一考察
熊本史談会と石人	—菊池川流域の場合—
山鹿市立博物館の設立	一 小序
文化財保護活動と市町村史（誌）の編纂	二 民俗学の立場から
県立装飾古墳館長として	三 考古学上における舟葬説の経過
(7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)	四 舟葬観念成立の時期について
(5) (4) (3) (2) (1)	五 岩原横穴墓と小原大塚横穴墓
(5) (4) (3) (2) (1)	六 結び
二、原口長之先生の略年譜 文化課主幹 松本健郎 6	
一、業績の概要 —	
三、歩かれた道 玉名歴史研究会会長 田邊哲夫 7	
一、考古学への道	八、シンボジウム「よみがえる装飾古墳」の開催 桑原憲彰 37
二、山鹿高校考古学部	—先生と共に励んだ日々—
三、熊本史談会・石人	九、原口長之先生を悼む 桑原憲彰 38
四、熊本県近代文化功労者顕彰を記念して 桑原憲彰 14	—郷土史研究に偉大な足跡—
—スライド映写解説内容—	
○編集後記	

温かい教育者

考古学者・原口長之の真骨頂は、終始変わらぬ温かい教育者であるという
ことである。その庶民的な謙虚な人柄が幅広い共感を生み、その共鳴がエネ
ルギーとなつて、前人未踏の文化財愛護の実践を可能にしたのであろう。

（田邊哲夫）

一、原口長之先生遺徳展の構成

企画展の趣旨

原口先生の残された足跡を辿つてみると、以下の四期に分けられるようです。

まず、優れた教育者として児童・生徒の教育に情熱を注がれた時代。そしてその教え子の中から、やがて次の世代を担う学問上の後継者が育つていきました。

次に、教師時代から、考古学者として県下の幾多の古代遺跡の発掘調査を実施し、特に装飾古墳の権威として全国的に知られた時代です。数多くの論文等を残されています。

そして、その研究

昭和30年山鹿高校教諭時代の先生
(菊池神社境内にて)

す。会員数一二〇〇

副館長 桑原憲彰

人、月刊雑誌「石人」は会誌として三五年の水きに渡って発行が続き、県下の郷土史に関する資料の集大成がなされます。この活動は生涯を通して続きます。

県の教育局退職後は、山鹿市立博物館長のかたわら文化活動も展開。郷土で子供たちの人生の指針となる郷土出身の隠れた偉人の顕彰、本の出版なども進められました。市博退職後は、乞われて熊本県立装飾古墳館初代館長に就任、準備室時代も含め三年間、館百年の基礎造りに情熱を傾けられました。

先生の真骨頂は、終始変わらず温かい教育者であり続けられたことでしょう。今回の企画展では、先生の偉大な足跡を辿り、その遺徳と御功績にもう一度接してみたいと思います。

(1) おいたちの記

先生は、大正二年(一九一三)現山鹿市藤井で、原

日勘吾・イヨの長男として誕生されました。地元の小学校を卒業の後、鹿本中学校に進学、そこで愛称「山嵐」とこと山川甚平先生に出会い、歴史学への興味とその後の人生の方向付けを受けられます。その後、熊本



現・山鹿市藤井の先生の生家

師範学校の一部に進学、そ

ここで人生の師と仰ぐ上

藤正人先生と出会いが
ありました。



新婚早々の先生夫妻（中国にて）

飾古墳の研究でした。

こうして、先生の名
は、装飾古墳の専門
家として学界にも知
られるようになつて
いきます。しかし、

弁慶が穴古墳の文様の発見
(昭和31年8月)

勤務の後の昭和一四年、
二六歳の時、中国山西
省榆次日本人小学校の
校長として、新婚早々

何と言つてもこの時
期の先生の功績は、
自分の学問上の後継者を育成されたことでしょう。先生の指導を
受けた弟子達が、考古学、歴史学、民俗学等の各分野で活躍し、
またその弟子達が、後継者を育成して各学界の裾野を広くしてい
ます。特に、文化財保護活動の分野に、教えを受けた人々が多く
活躍しています。

の芳枝夫人と共に大陸に渡られます。

そこで、学校建設、そしてその教育へと情熱を燃やされたので
すが、街頭の市場で見掛ける古代の文物が、先生をして次第に考
古学への関心を誘つていきました。そして、昭和一九年京城帝國
大学に入学されます。しかし翌年終戦となり、止むなく帰国。帰
国後は志を立て広島臨時教員養成所に入学、二三年の卒業後、県
立御船高校に赴任されます。

(2) 山鹿高校考古学部の創設

山鹿高校に赴任された先生は、早速考古学部を創設され活動を
開始されます。昭和二七年的筈尾甕棺（植木町）、二九年的馬塚古
墳（山鹿市）、三〇年の白塚古墳（同）調査、そして三一年に弁慶
が穴古墳の調査と統きます。弁慶が穴古墳の調査では、舟と馬と
太陽等の装飾文様の描かれた新しい装飾古墳の発見となり、学术的
的価値が高いとして「史跡」として国の指定を受けたのです。先
生の学問的功績の第一位は、弁慶が穴の調査と、その後に続く装
飾古墳の調査と統きます。

山鹿高校から熊本市内の第二高校に転勤された先生は、すぐ同
高に考古学部を創設、顧問として多彩な部活動を開催されます。
しかしその数年後、県教育委員会の辞令により、教育局指導室の
高校社会科の指導主事として赴任されます。そして四年間、県下
の社会科教育の指導に当たられました。

(3) 第二高校から県教育局指導主事へ

高校生の時、クラス担任として指導を受け、現在も高校教師と
して教科指導に当たっているベテラン教師の「高校生の時にもい
ろいろ学ばせて戴いたが、教師となつた現在の方がより学ばせて
いたくことが多い」との言葉は、指導主事としての先生の面目

を良く表しているようです。教師への教科指導の他に、租税教育も担当され尽力されていました。

また、卒業後の教え子に対する面倒見も良く、三〇組以上の媒酌人も勤めておられます。頼まれ仲人ではなく、適切な相手を見つけ御世話をされていたのです。教え子に限らず、同僚の若い独身の先生の御世話もされており、先生のアルバムには、当時送られてきたその人達の初子の写真等が、大切に保存されていました。

(4) 熊本史談会と石人



史談会発足当時の先生（昭和35年）

先生の第一の功績は、山鹿高校教諭時代に、鹿本史談会を復活させ、それを母体に会員一三〇〇人、支部二を擁する熊本史談会を育成されたことでしょう。そして会誌である「石人」は、会発足以来、月刊誌として毎月欠かさず三五年間の永きにわたって刊行され、その数は四二〇号にも達しています。その中に収載された郷土史関係の資料等は膨大なもので、まさに昭和の肥後国誌と言つても過言ではないでしょう。

「埋もれているもの

を掘り起こし、減びゆくものを護りつづけ、

民族の歩いて来た道を探ろうとする。それは、徒に過去を懐かしむだけのものであつてはならない。過去もそつてあつたように、将来もまたそつてであろうとする、たくましき民族の根底に培うものでありたい。としよりも若い者も一緒になつて、ことに次の世代を信頼しながら、ひとりひとりが、一握りの力を持ちよつて作る雑誌が『石人』である。——毎月石人に掲載される綱領に、先生の考えがよく表わされています。

(5) 山鹿市立博物館の設立

「山鹿市に博物館を」とのキヤンペーンのもと、当時の古閑一夫市長と共に山鹿市立博物館を設置された先生は、新設博物館の館長として八年間勤務され、その基礎づくりに努力されています。

その在任中に「我家の自慢展」「戦中・戦後生活展」「西南の役展」「高橋広湖とその一門展」「帆足長秋父娘展」等を企画、特に郷土の先輩に優しい敬愛を込めた企画は、多くの地元の人々の共感を呼びました。先生も、帆足長秋には余程感銘を受けられたのか、熊本史談会二五周年記念事業として、博物館前に父娘の銅像を建立し「国学者帆足長秋とみさと」という本も刊行されました。「その昔、片田舎の貧しい生活の



山鹿市博に建てられた帆足長秋・京父娘の銅像

— 3 —

中につても、学問を志し懸命に勵んだ父娘がいたことを、是非今の若い世代に知つて貰いたい」と、ふと漏られた先生の言葉が印象に残っています。この時期、肥後を代表する眼鏡橋も、民家も、博物館の敷地に移転させ保護されました。次に、西南戦争の激戦地である周辺鍋田台地には、戦没者慰靈碑を建設されています。

(6) 文化財保護活動と市町村史の編纂

先生の広い学識は、單に考古学に留まらず歴史学・民俗学等に

もおよび、県の文化財

専門委員をはじめ、各市町の文化財保護委員の委嘱を受け、指導的役割を果してこれらました。

また、国指定の装飾

古墳「千金甲古墳」の装飾文様の破損問題を契機に、熊本県文化財保護協会の設立に尽力されます。鳥田四郎会長のもと、事務局長として二〇年間、年六回の「文化財情報」の発



史跡探訪で石造物の説明をされる先生

(7) 県立装飾古墳館館長として



熊本県立装飾古墳実習棟起工式当日の先生

(平成6年4月13日)

平成三年、県文化課内に「古墳の森資料館準備室」が設置されますと、その顧問として就任され、古閑先生の援助のもとその設立事業を強力に推進されていきます。そして平成四年に熊本県立装飾古墳館が開館すると、その初代館長として百年の基礎を固めるべく五つの館運営の

行と、年十回前後の研修会開催、文化財関係報告書の頒布などを通して、文化財保護の普及啓発に努められました。平成六年に、創設二十周年記念式典を能木で開催されましたが、各市町村バラバラで横の繋がりのなかた文化財保護委員を、これらの研修会等を通して結果された功績は大なるものがあります。

また、熊本市、山鹿市、植木町、北部町、鹿央町、三加和町、河内町、菊鹿町の各市町村史の編纂に携わり、大半は編纂委員長として、地域の歴史の解明に努められました。

基本方針を定め、その運営に当たられます。内にあつては、団体入館者の増加に焦点をあて、館職員が必ず付いて説明をする制度の新設など、また、外にあつては鹿児町と共に、全国的に著名な学者を招聘し「全国装飾古墳シンポジウム」を開催したり、館の基本方針に従い運営に当たられました。特に、今後の博物館の在り方として、県民参加型の体験学習を重視する博物館を目指し「実習棟」の建設に着手されます。そして、平成六年四月待望の起工式が行われます。開館以来、日々回る様な多忙の一周年で、高齢の先生はさすがに疲れられたのか「素晴らしい器（実習棟）」に、似つかわしい学習内容を、そして生涯学習の場に」の言葉を残し館を去られます。足掛け三年、退任時には確固たる館の基礎造りができていたのです。

(8) 名誉館長就任と晩年

退任の翌日、平成六年五月一日付けて県から名誉館長の委嘱辞令が出来ます。県も、先生の永年の文化財保護に関する功績に報いたのでした。「やり残したことがたくさんある。今から人生の総仕上げをしなければ」と先生は張り切っておられたのですが、この頃から体の不調が目立ち始めます。その後、腰痛のため国立熊本病院入院となり、一時退院されますが再び入院。その後お体の衰弱がひどく、九月一日肺炎のため逝去されました。名誉館長就任から僅か四ヶ月後のことです。享年八一歳でした。

その後、吉岡先生からの熱心な推挙もあり、逝去後四九日を待たずして國から勲五等双光旭日章が届き、一〇月二八日福島知事より御遺族に伝達されました。

明けて平成七年一月二二日、先生が心待ちにされていた実習棟が完成し、史跡公園「肥後古代の森」の完成も兼ねて、竣工式が、華やかな中にも厳かに挙行されました。その時式典に出席した人々のみんなが「この晴れの日を、是非先生に見せてあげたかったのに」という、一抹の感慨に



館の実習棟と肥後古代の森完成式（平成7年1月12日）

二、原口長之先生の略年譜

文化課主幹 松本健郎

大正二年一月三十日、熊本県山鹿市大字藤井に生まれ、昭和九年三月熊本県師範学校本科第二部を卒業し、熊本県公立小学校訓導に任じられ、県内の小学校を経て昭和十四年六月、北京日本総領事館へ出向。中華民国の日本小学校訓導、同校長、青年学校長、附屬幼稚園長として活躍して終戦を迎えた。

その後、意図するところあって広島臨時教員養成所歴史地理科に入学、昭和二十三年三月、同校を卒業後、熊本県の高等学校教員となり、御船高校、山鹿高校、鹿本高校、第二高校で教鞭をとり、昭和四十四年四月から県教育局指導主事をつとめ、昭和四十七年三月に定年にて退職した。その後も昭和五十三年から昭和六十一年まで山鹿市立博物館長、昭和五十六年から昭和六十一年まで県立農業大学の講師、昭和五十七年から平成二年まで熊本大学文学部講師、平成四年から平成六年四月まで熊本県立装飾古墳館館長等をつとめた。

山鹿高校時代から県下の遺跡調査に積極的に取り組み、弁慶が穴古墳（国指定史跡）、チバサン古墳（同）、鍋田横穴群（同）、馬塚古墳（県指定史跡）、白塚古墳（同）を始め、多くの遺跡調査を手がけている。とくに、弁慶が穴古墳等、装飾古墳の調査、研究に大きな成果を収め、昭和三十五年には日本考古学協会員に推薦されている。

山鹿高校、鹿本高校、第二高校に在学中、高等学校における考古学部の活動育成につとめ、文化財保護に携わる多くの人材を育てた。

昭和四十一年、熊本県文化財専門委員（昭和五十一年、熊本県文化財保護審議会委員と改称）の委嘱を受け、平成六年五月まで文化財の指定や保護に尽力した。

また、永年にわたり熊本市、山鹿市など、市町村の文化財保護委員として文化財保護に関わり、指導的な役割を果たした。

先生の面目躍如たる点は、考古学のみならず、古文書解説等の歴史学、民俗学にも造詣が深く、その能力を買われて、熊本市、

山鹿市、植木町、北部町、鹿央町、三加和町、河内町、菊鹿町の市町村史（誌）の編纂に携わり、地域の歴史の解明に尽力した。

山鹿高校在職中の昭和三十四年、鹿本史談会を主宰し、機関誌「石人」を発行。この会は後に城北史談会、次いで熊本史談会に発展し、現在の会員数は千三百人を超し、平成六年には結成三十周年を迎えた。「石人」は毎月欠かさず発行され、平成六年九月号で通算四二十号を数える。会誌を通じた研究活動、史跡探訪、古事記を読む会等の研修会、民話集の発行等、会の活動は多彩であった。

昭和四十八年、国指定の装飾古墳である千金甲古墳の装飾文様の破壊問題等を契機として、熊本県文化財保護協会の設立に尽力し、島田四郎会長のもとで事務局長となり、会務を遂行した。年十回前後の研修会開催、年六回の機関誌発行、文化財関係報告書の頒布等を通じ、文化財保護の普及啓発につとめた。

同年、肥後琵琶が国選択の無形文化財となり、その保護のために肥後琵琶保存会（島田四郎会長）が結成され、その副会長として関係資料の調査、録音や採譜、演奏会の開催など、減びゆく文化財の保護に奔走した。平成六年現在では、肥後琵琶は九十歳を越えた人が一人となってしまったが、先生の努力により、関連する資料が蓄積されたことはせめてもの救いである。

これらの功績により、個人として昭和五十三年文化庁長官表彰、昭和五十三年熊日賞、平成元年荒木精之文化賞、平成二年熊本県近代文化功労者顕彰等を受けていた。また、昭和六十三年、熊本県文化財保護協会として文化庁長官の文化財保護功労賞、昭和六十二年、熊本史談会としてサントリー地域文化賞を受賞している。

三、歩かれた道

玉名歴史研究会会長　田邊哲夫

一、考古学への道

原口長之は鹿児島県大道村藤井一九〇七番地（現山鹿市）で原口勘吾・イヨの長男として大正二年一月三十日生まれた。四人兄弟の二番目で彼のほかは皆女であった。藤井というところは菊池川と合志川とが合流する地点で、広々とした山鹿盆地のなかでも、よく堤防が決壊したところであった。人柱を立てて堤防を復旧したと伝えられるほどの涙の川であったし、村の困窮に拍車をかけ

ていた。父が村役場に勤める傍ら、一部を小作に出す程度で、四人の子供を師範学校に出したということは、容易なことではなかつたと思われる。

長之は村の小学校を出て、県立鹿本中学校に進学した。ここで彼は山川甚平先生に出会う。広島高等師範学校を出たての先生は強烈な個性の持主で、容貌も行動も愛称の「山嵐」そつくり。躍進途中にあつた鹿本中学の名物先生となつた。気迫のこもつた大声で大局的な視点から歴史の講義があつた。歴史が好きになつた原口少年は山川先生の鉄砲撃ちの獣のお供をしながら、先生の厚い人情味を学ぶ。

中学四年のとき、熱発して髪が抜け、目が見えなくなるという大病をする。いまも治り切っていないそうだが、ともかく卒業して療養に励む。

やや遅れて彼は熊本師範学校の二部に進学する。当時、陸士・海兵や師範は人気のあるコースで、彼の周辺も先生が一杯であつた。ここでも彼は人生の師を発見する。肥たごを担いで学校農園の手入れしている人が工藤正人先生（熊本県近代文化功労者）であることを知り、その教育実践に強い感銘をうける。長之は友人三人を誘つて先生宅で寝食を共にすることになった。この「耕道塾」がまた、原口長之を強く育てていった。

昭和九年、師範を優秀な成績で卒業、郡内の田島小学校へ赴任、不景氣で月給遅延のときである。同十二年中国との戦争が始まる。師範のときの与紀熊雄先生（漢文）の泣いて国事を慨される姿に接していた影響もあるのか、同十四年二十六歳の彼は中国山西省

榆次日本人小学校の校長として赴任する。直前、女子師範出の芳枝夫人（田姓福川）と結婚、ともに大陸に渡る。学校の建設から、生徒の急増、軍との折衝などに汗を流したが、街頭の市場で見掛ける古代の文物は次第に考古学への関心を誘つていった。

二、山鹿高校考古学部

昭和十九年彼は京城帝國大学に入る。翌年終戦、第一便で帰国、広島高等師範学校が併設の広島臨時教員養成所に入ることを考えたが、早く卒業できる基督教を達んだ。極度の食糧難のなか、原爆で吹きとんだ学園での勉強は容易なことではなかったと思われる。同二十三年卒業して熊本県立御船高校に奉職する。

翌年、郷里の山鹿高校に転勤、早速考古学部を創設、鹿央町下原で小児喪棺を発掘した。戦後は、神話に代わって考古学

が科学的歴史を代表する立場

となり、その知識の斬新さで

歓迎されていた。すでに熊本

県でも熊本語学専門学校の学

生高士与市・上野辰男らが稱

荷山古墳（熊本市）から豪華

な副葬品を発掘し、玉名高校

では田邊哲夫が考古学部を組織して古閑原貝塚から縄文の

糸を発掘して話題となつてい



昭和30年代の山鹿高校校門

たのである。

戦前から、熊本県の代表的考古学者は菊池西部実業高校の坂本経堯と隈庄町の医師小林久雄とであった。坂本は玉名高校考古学部の指導をしていたが、原口が活動を始めたので山鹿高校考古学部の指導も自ら買って出た。昭和二十七年の植木町筒尾の喪棺の発掘に統いて、二十九年の山鹿市馬塚の調査は山鹿市の協力も得て、三十二年弁慶が穴古墳の清掃にかかった。

ここは浮浪者の「ねぐら」となって、内部で焚火も行わされてい

たから、古墳の内壁は真っ黒に煤けていた。這い上がる虫をDD

Tで退治しながら、壁に水をぶっかけて「たわし」でこすった。

すると、驚いたことに純々と雄大な壁画が姿を現したのである。

ゴンドラ型の舟が十一艘、概と考えられる荷物を乗せ、その上

に鳥が止まっている。首をうなだれた馬を載せた舟もある。赤一

色でたっぷりと油絵具が滴るほど筆太に描かれているので迫力が

違う。装飾古墳の最高傑作とも言える壁画の発見であった。

熊本県下の装飾古墳は大正時代から注目を浴びていたが、その付けるかのよう馬の図柄であった。

原口長之の学問的功績の第一位は弁慶が穴の調査とそのあとの

肥後ににおける装飾古墳の研究である。折から山鹿出身の東大教授江上波夫の騎馬民族説が発表されて騒然としているなかで、それを裏

観である。しかも、熊本県には福岡県と並んで全国の装飾古墳の半ば近くが存在する。熊本県立美術館が出来たとき、熊本県の美術の特色を示す展示に、これらの装飾古墳が選ばれたのは当然であった。

この発見はまさに運が良かったのである。本人も周囲もそう思つてゐる。そしてこの強運がこの後の原口長之の生涯を推進していった。

当時は公費による発掘調査費が殆ど支出されないのであるから、県や大学による発掘調査よりも、発掘要員を持つ高校考古学部による発掘調査が全国的に多かった。県下でも先ず玉名高校と山鹿高校が車の両輪として活躍していた。こんななかで、原口は生徒を人夫代わりに使うことを嫌つた。人間的な交流を深める

土器の製作実習（昭和37年・山鹿高校）



という合宿が持つ精神的な効果を重視していた。こんななかで、原口

学問的雰囲気も与えたいと考え、夜のミーティングには生徒も参加させた。そして、学問的要請などを指導者の坂本経亮と論争してまで教育を優先した。

同三十二年の鹿本町大塚古墳の調査、翌三十三年阿蘇一の宮町上御倉古墳でも装飾を発見、

宇土市森貝塚、熊日の下益城郡甚九郎山古墳・孤塚古墳の総合調査に参加、翌三十四年には笠伝襄棺群、持松など千田の石棺群、方保田の弥生住居跡の発掘、八代市五反田の古墳調査参加。三十五年には熊日の国分尼寺調査、三十六、七年の方保田古墳調査には玉名高校田邊哲夫も参加、三十九年山鹿市チアサン古墳、人吉市の大村横穴群、鹿央町桜の上横穴群、山鹿市長岩横穴群など、いずれも装飾古墳の実測調査。三十八年には鹿本高校四十年には第二高校（熊本市）に転勤、それぞれ考古学部を創設したので各高校考古学部が参加する大発掘となつた。

四十一年になると熊本県文化財専門委員になつてゐるので、県社会教育課が行う道路公園関係の石川山古墳群（植木町）の調査に参加。四十二年熊本県の鞠智城調査に参加、瀬戸口横穴群（七城町）調査を主宰、四十四年には県指導主任になつたので、あまり動けなかつたが、女王の墓かと騒がれた向野田古墳（宇土市）にも参加、退職後文化課嘱託時代には妻の墓墳墓群（本波市）の移築、チブサン古墳の修復、田川内古墳（八代市）の修復の指導、沈日奥野遺跡（城南町）や熊本城二ノ丸や西岡台城跡（宇土市）の調査団長などが彼が手掛けた主なもので、小さな調査は枚挙に暇が無い。

三、熊本史談会・石人

昭和三十四年夏、米原長者の遺跡（鞠智城）を見に行つての帰り、山鹿高校図書館でお茶飲み話しに鹿本史談会を復活しようと

いうことになった。鹿本史談会というのは昭和二十六年にはまだ山鹿日輪寺の住職であった圭室諦成（たまむろたいじょう）先生の指導で出来ていた会であったが、先生が熊本女子大、さらに明治大学の教授として転出され、下火になっていたのである。

月に一回史跡探訪をして、ガリ版刷りの『石人』を出すことになった。ガリを切ったのは生徒の桑原憲彰君であった。

会員も続々と増え、地域も広がって、翌年には城北史談会、同四十三年には熊本史談会と改称した。機関誌の『石人』も活版印刷で毎月欠かさず刊行され、すでに三十一卷三百七十号を突破している。原口長之の最大の功績はこの「熊本史談会」の運営と『石人』の刊行にあると言つても過言ではあるまい。

この雑誌は四十ページ、会員が増えたからといってページを増やさない。堅実なのである。このページだから論文はまず載せられない。「ここにこんなものが」とか、「子供に聞かせたい話」とか、「研究報告」とか、さらには「隨想」や「文芸」、そして「会員からの便り」という内容で、誰でも投稿しやすい。

雑誌は郵送費が馬鹿にならない。支部をたくさん設けて世話人が配布して回る。毎月の例会は史跡などの見学会である。自動車は相乗りにして、油代を負担しあう。みんな楽しみにしている。年に二回は大旅行、全国を股にかけて実施する。それも原口大先生の解説だから大変な勉強になる。原口先生の庶民的な一挙手一投足がたまらない魅力である。励ましの言葉をよく掛けてくれる。それでいて、ここぞという所では頑固である。ノーを言える人である。信用できる人なのだ。年に一回は大懇親会もある。

この会は目的意識がはつきりしている。綱領を毎号掲載する。

「埋もれているものを掘りおこし、滅びゆくものを護りつけ、民族の歩いて来た道を探ろうとする。それは徒らに過去をなつかしむだけのものであつてはならない。

過去もそうであつたように、将来もまたそうであろうとする、

たくましく民族の、根基に培うものでありたい。

としよりも若い者も一緒にあって、ことに次の世代を信頼しながら、ひとりひとりが、一握りの力を持ちよつて、作る雑誌が『石人』である。」

会員は千三百人、支部は二十一という大盛況もうなづける。この数が原口長之の総ての事業の応援団であり、エネルギーなのだ。

四、文化財保護

昭和二十四年一月法隆寺金堂壁画が焼失するというショックイングな事件が起り、文化財保護についての国民の関心が高まって、異例の議員立法で、翌二十五年文化財保護法が成立した。しかし、市町村段階では積極的な対応は殆どなされていなかった。

そのような中で同二十九年山鹿市は市制施行、同時に山鹿市文化財保護委員会が設立され、彼はその委員に就任している。彼を中心とする山鹿高校考古学部の活躍が県下に先駆けてこの体制を生んだのであろう。なお、この委員を彼が熊本市へ転出する同四十年まで務めている。

同三十五年には日本考古学協会会員に推薦され、日本学術会議の選舉権も獲得、一人前の考古学者として公認されることになる。

同四十一年熊本県文化財専門委員となり、乙益重隆・田邊哲夫とともに専門的調査を担当し、文化財行政にも発言することになった。この職は同五十年の法改正によつて熊本県文化財保護審議会委員と改称、現在もその職にあつて活躍しているのである。同四十五年多年の文化財保護活動の実績が認められ、文化庁長官表彰を受け、同五十三年には文化庁創設十周年にあたつて記念表彰を受けている。

同四十七年熊本県にも文化課が発足することになり、田邊哲夫が初代課長に就任。この年、熊本県教育庁指導主事を定年退職し

た原口長之は、折から仕事が急増した文化課の、発掘した埋蔵文化財の整理・調査を行い報告書の刊行までを推進するため新設された文化財収藏庫所長（嘱託）に懇請されて就任し、四十九年まで務め、収藏庫の業務の基礎を確立した。

翌四十八年文化課の外郭団体として設立された熊本県文化財保護協会にも、その事務局長として兼任を要請された。原口は單なる外郭団体に満足せず、市町村の文化財保護委員会などの連携のため、自主的な団体として育成するよう尽力し、「文化財情報」という機関誌を発行、報告書の頒布、地方にまで出掛けての研修会など類例の少ない積極的な活動を展開、現在に至っている。

まさに減び去ろうとしている肥後琵琶は、各地の琵琶のなかでも最も古い形態を留める貴重な無形民俗文化財であるのだが、伝承者の老齢化が進んでいる。熊本史談会ではその保護保存に前年から取り組んでいたが、四十八年肥後琵琶保存会が設立され、文

化課に事務所を置き、彼が副会長に就任し、記録保存、演奏会、後継者育成などの事業を手掛け、今日に及んでいる。また、手漉和紙の技術保存にも意を用い、講習会を開いたり、県商政課の依頼で調査報告書を執筆した。

熊本県文化財保護行政の核となつてゐる県文化課の中核として活躍している隈昭志教育審議員、桑原憲彰主幹、松本健郎調査係長は彼のまな弟子である。

なお、同五十年からは熊本市文化財保護委員も兼ねている。

五、山鹿市立博物館

山鹿高校考古学部が毎年の発掘で集めた遺物は膨大なものになつていった。彼らの熱意と校長の理解によつて学校内に資料室が設置され、優れたその陳列ぶりは全国の高校でも五指に入ると慶應大学の江坂輝弥教授が紹介したほどであった。

昭和三十六年二月「石人」の巻頭言で「郷土館がほしい」と書いたのがきっかけとなって、世論が醸成されていった。同三十八年には古閑一大山鹿市長は市役所建設と併せて考慮すると発言、翌年建設期成会が発足、熱心な運動の甲斐あつて、同五十三年開館に漕ぎつけたのであつた。もちろん、原口長之が館長であり、学芸員も一人いる。

山鹿市郊外の国指定史跡鍋田横穴群と、これもやはり国指定史跡チブサン古墳との間の台地の上に立派すぎるほどの大博物館が建つた。博物館の運営は難しい。常設展示だけなら、一度見た人はもう訪ねて来てくれない。企画展示・特別展示を次々に打つ必要

がある。そのアイディア

と努力はたいしたもので、
普通の歴史民俗資料館で
はそれができない。小さ

い市で「博物館」かと、
オヤと思うが、博物館と

して胸を張れるほど、原
口館長はそれをやり遂げ
たのである。やがて、先

生は熊本大学でも博物館
学を講義する。

「我家の自慢展」、「戦中戦後生活展」、「西南の役展」、「高橋廣潤
(画家)」とその「一門展」、「帆足長秋(国学者)父娘展」など、格

式張らずに、親しみ深く、郷土の先輩に優しい敬愛をこめて企画
されており、それは館長の人柄なしには生まれて来ない企画であ
る。帆足長秋には余程の感銘を受けられたのであろう。熊本史談
会三十周年記念事業として博物館の前庭に父娘の銅像を建立し、

「国学者帆足長秋と京(みさと)」という本も刊行された。

肥後を代表する文化財である眼鏡橋も、民家も、博物館の敷地
に移転させて、保護した。この鍋田台地は西南の役の激戦地でも
あるから戦没者慰靈碑も建設した。

文化庁が各県に薦めて建設しつつある「風土記の丘」事業があ
る。熊本県は異例だが、ここチブサン古墳一帯と鹿央町岩原古墳

と玉名郡菊水町江田船山古墳一帯との三か所から成っている。チ
ブサン古墳・オブサン古墳・古墳の森などの整備も進み、博物館と
一体化出来、「風土記の丘」は山鹿博物館の屋外施設の觀する所である。

山鹿市内には「八千代座」という明治の劇場が荒れ果てて残つ
ていた。それでも壊してしまわない持主も立派だが、その保存運
動が起きた。勿論、中心は「石人」の面々である。とうとう国指
定重要文化財にまで漕ぎつけた。

六、山鹿市史など

原口長之は考古学者であるばかりでなく、古文書も読める。民
俗学もわかる。今時貴重な幅広い学者なのである。それに学者問
には人脈が広く、その信頼を集めている。折から全国的におこった
市町村史編纂のブームのなかで、編纂委員長として各地で迎えら
れることになる。

昭和四十七年から発足した飽託郡北部町史は、同五十四年にな
つて完成した。「北部町史」の「あとがき」で「町史を作るとい
うことは、ただ数人の専門家で書き上げれば良いというものではな
い。全部の町の方々に協力していただいて町民全部で作った町史
でありたいし、これを機会に町民としての意識を掲げ動かし昂揚
するものでなければならない」と述べているように、地元の方々
で編纂協議会を設置して調査研究に入っていた。千ページ
のうち、それぞれ百ページの民俗編と史料編を設け、史料編には
各委員苦心の石造物に多くを割き、町村史に新しいスタイルを開
いたのであった。

また、同四十八年から発足した植木町史も同五十六年には完成

した。『植木町史』でも、校区ごとの調査委員を設け、ほぼ同様な趣旨を買っているのである。ともに熊本日日新聞社から出版文化賞を受賞している。

同五十四年から着手した『山鹿市史』も、同六十年には各八百ページからなる上下巻、史料をふんだんに載せた別巻と、三巻の大部の市史を完成したのである。これも出版文化賞に輝いた。平成元年『鹿央町史』が完成し、三加和町史・菊鹿町史も進行中である。いずれも原口長之が編纂委員長を務めたもので、最近の学問的成果を踏まえながら、しかも、町民に理解されやすいような平易な表現になつておらず、彼の主義主張が十分發揮されたものになつてゐる。しかも、驚くことは編纂の期間が極めて短いことである。これは依頼者側としても大歓迎なわけであるが、編纂期間中に精力的な研究の推進が出来にくいう難点がある。しかし、多年の研究の蓄積があること、調査に広く人材を動員できるよう、手ねて『石人』を通じて育成してあるからカバー出来たというこ

とであろう。

このほか、『河内町史』の原始古代を担当、脱稿。本格的規模で編纂が進められている新熊本市史にも原始古代担当の主任を務めているのである。

このような広汎な活動に対し、信友社賞(同五十五年)、サントリ一地域文化賞(同六十二年)、荒木精之文化賞(平成元年)など数々の賞が贈られたが、その賞金をもつて熊本史談会員の労作「子供に聞かせたい話」を集めた『肥後の民話と伝説』が史談会三十周年記念として出版された。



サントリ一地域文化賞贈呈式の際、挨拶される先生

原口先生はまだこのほかに、熊本県の考古学の成果の概説書の執筆を依頼されている。勿論、先生のこれまでの研究を集大成して刊行していただきたいし、「石人」の顔頭言や時折りの随想など先生の主張も本にまとめてもらいたい。

先生は熊本市の北の郊外、池田町に住んでいます。いまはすっかり建て込んだが草分けであった。新婚早々、硝煙漂う中国までお供し、今は『石人』の編集から、史談会の旅行の世話まで手伝うよく出来た奥さんとの間に、早稲田を出て大学の教授になつている長男宏房氏、高校の先生をしている次男和房氏、熊本大学の史学科を出て中学の先生をしている長女の尚子さん、いずれも立派な社会人になつて独立している。親としても及第である。

先生は退職してから、現地に調査に出掛けられるよう自転車の運転免許を取つたし、ワーフェを聞くようになつた。年を感じさせない頑張りである。先生のこれから健闘を大いに期待したい。(平成二年県発行・熊本県の近代文化に貢献した人々)より)

四、熊本県近代文化功労者顕彰を記念して

—スライド映写解説内容—

熊本県立藝術古墳館副館長 桑原憲彰

熊本県が他県に誇り得る文化財は、とたずねられたら、私たちには即座に「装飾古墳」に「眼鏡橋」と答えるでしょう。

私たちが生まれ育った山鹿市一帯は、装飾古墳の集積地であり、古代文化的宝庫です。河童塚古墳、馬塚古墳、臼塚古墳、弁慶が

穴古墳、チブサン古墳、

鍋田横穴群等々枚挙に暇が有りません。

これらの古墳の殆ど

が装飾古墳であり、こ

れらの古墳の調査を手

がけられたのが、私た

ちの恩師の原口先生で

ありました。そこには、

先生と共に過ごした私

達の青春の思い出が沢

山詰つているのです。

当時、先生のお住ま

いは

山鹿市の藤井に



山鹿高校考古学部の插籠期・馬塚古墳の発掘調査
(昭和29年11月)



旧鹿本中学の校歌にも歌い込まれた不動岩

あります。私達は、まるで親類のうちにでも行くように、先生宅に遊びに行くのが楽しみであり、夜は泊めてもらい、遅くまでいろいろの話をお聞きしました。

先生が幼少の頃遊ばれたという藤井八幡宮も、すぐ近くにあり、ここは、先生が青春時代を過ごした鹿本中学(現鹿本商工高校)の校門です。学校の北側には、校歌にも歌いこまれた高さ五十米の不動岩が高く聳えています。

若い日の先生は、この巨岩の下で同級生と共に焚き火をし、夜を徹して人生を語り明かされたとお聞きした事があります。夜になるとこの巨岩の頂上から、バラバラと小石が降ってくるそうです。

私達の先生との出会いは、山鹿高校においてであります。現在、校地には市の中央公民館と県事務所が建ち、当時の面影を残すものは、この楠の大木一本だけです。この木陰に抱かれるように山鹿高校跡地の記念碑が残るのみで、当時の懷

かしい木造校舎は跨

かたも在りません。

私達考古学部の卒業生の数々の思い出を、当時の先生方とともにしばらく紹介いたします。

原口先生の教育の原点——まさにこの一枚の写真のなかに凝縮されているよう

です。——先生の笑顔と二人の生徒の嬉しそうな表情を見てください。考古学部の生徒であります、この原点の上にたって、先生の教育は展開されていったのだと思います。

その後、二年程の文化課勤務の後、嘱望されて、新設された山



原口先生の教育の原点——それは終始変わらぬ温い教育者であり得たこと（昭和34年3月）

寝耳に水の出来事でした。唚然とした記憶がいまも残っています。そして四十年には第二高校に転勤され、考古学部の指導に当たられます。そして、四十四年には、社会科の指導主任として県の教育局の指導室に転勤されます。この写真は、昼休みに県庁舎前庭でくつろがれる先生のお姿です。



山鹿高校教諭時代（昭和35年頃）

され、その基礎造りに情熱を傾けられることになります。館としての内容造りは勿論のこと、数々のアイデアをもとに企画展を立案、

実行に移されております。

その中でも、深い感謝を受けたのに、肥後国学の始祖「帆足長秋・みさと」親娘の顕彰があります。教育者

今度は、当時の校内での原口先生のスタッフを少し追っかけてみましょう。この写真は先生四十歳前後の写真で、そろそろ老眼が必要になられた頃のものです。他の写真も大体同時期のものですね。

として、現代の風潮に

深い憂いをもたれた先生は、幼くして学間に

志した長秋・みさと親娘の銅像を建立すべく

奔走されます。

この先生の考えは、多くの人々の共感をよ

び、当初の計画を上回るひと周り大きな銅像

となつて除幕式の当日

を迎えます。貧苦のな

かで学間に志した親娘の姿は現代に蘇り、今

も博物館の入り左手から、訪れる子供達を励まし続けています。

その他、全三巻からなる「山鹿市史」の刊行では、先生の山鹿高校以来の考古学研究の集大成として考古学分野を執筆、また執筆陣のキャップとして編集に当たられ、熊日出版文化賞に輝いておられます。その外、西南の役の戦没者慰靈碑の建立等にも心をくだかれました。昭和六十一年、創設期における博物館の私の役割は終わったとして、自らその職を退かれています。

これらの仕事と並行して努力してこられたのが、熊本史談会の育成であります。五六十人の小人数から発足した史談会も、現在千三百人の会員を擁する大きな団体に成長致しておりますが、



昼夜み県庁舎前庭にて（昭和45年）



近代文化功労者受賞祝賀会における先生御夫妻

この写真は、発足当時の鹿本支部の世話を人々であります。故人となられた人もありますが、この写真は、当時の、当地方におけるカラーフィルムのはしりだった記憶があります。

史談会の強い團結の基礎となつた「史跡巡り」は、まづ、自ら

の住む地元から始まり、貸し切りバスによる県内の史跡めぐりから、さらに県外に足を延ばすようになり、四国、近畿、青森、北海道と全国にわたるようになります。会員の輪も徐々に広がつて参ります。

各史跡・遺跡における現地での、想切、丁寧な先生の解説指導は、この研修旅行の価値を高からしめました。

この研修旅行は、近

年に到つては遠く海外にも広がり、韓国・中國（シルクロード）に

迄もおよびます。写真の、北京原人の骨の化石が出土した中国周

日店での、身振り手ぶりを交えた先生の説明の御様子であります。

また、熊本史談会の会誌である「石人」は、月刊誌として平成一年十二月現在、三十一巻、

三百七十二号を数える
ようになりました。月

れます。

刊誌の発行と、千三百
人の会員への発送は、

家族縁出の、夜を徹し
ての作業とかで、大変
な御苦労と承っております。

この仕事のほかにも

「山鹿文化財を守る
会」の指導や、史跡巡
りへの同行、そして年
一回開かれる考古

学部のOB会等への出
席など、先生を聞く会では常に交流を深める事に深い愛情をもつ
て接しておられ、「今度は僕の家でやろう。みんな一緒に来なさい。」との、先生のお言葉に甘え、大學して自宅に押し掛け、大騒
ぎすることも度々のことあります。自宅にお伺いすると、時々
先生と同年配としか思えない古い教え子が来ておられ、嬉々として話に興じておられているのをみて、先生の感化の偉大さにびっくりすることもあります。

これら教育者としての生徒の指導、後継者の育成、文化財の保
護活動等が、世間一般の良識ある人々の共感を呼び、昭和六十二
年のサントリー地域文化賞・平成元年の荒木精之文化賞・さらには



中国周口店で説明される先生



中原山鹿市長より祝辞を受けられる先生夫妻

先月の十一月二十三日に、菊水町の（国指定史跡）塚坊主古墳

の石室内で、石屋形に
描かれた装飾文様が発
見されました。お知ら
せすると、発見の翌朝
の朝早く、自ら車を運
転して調査にお出掛け
くださいました。

先生の、学問に対する
深い情熱そして
学問に対する学者として
の「したたかさ」を
垣間見る思いが致しま
した。調査は、現在も
県文化課の手で続行中

の風景です。私たちが、「先生今回の受賞、おめでとうございます。」
とお祝いを申し上げると、「なーに、後が短くなつたで言うこつた
い。」と笑いながら言われます。「お祝いをしましよう」というと
「皆に迷惑を掛けるけん」となかなか「ウン」と言われません。

特に、受賞の時など、胸に赤や白の花を付けるのは、お嫌いな
ようでござります。

山居布褐叶

卷之三



卷之二

弁慶が穴古墳調査直後の先生のはがき（昭和31年8月）



装飾文様が発見された塚坊主古墳の調査（平成2年）

より今の方が、教えを受けることが多いとも述懐しております。先生は、常に私達に對して、「君達は、青は藍よりいで、藍より青したい」とよく言われます。また、「今から君たちの時代だよ」とも。

私達は若い時代に良い師に巡り遇えて、幸せだったと思います。今後とも、御夫婦御健康で御活躍いただき、私達に御指導賜らんことを切に願つて止みません。今回の受賞、先生・奥様、本当におめでとうございます。
（平成二年十二月二十二日）

でありますか、私達一同御指導を楽しみにいたしております。

教育者として、また考古学者としての先生から、私達は数々のおしえを戴いておりましたが、高校の教壇に立つ教え子は、授業の進めかたや口調が、先生の授業に似てきたと言つておりましたし、かつて考古学部で教えを受けた県文化課の職員は、高校時代

五、山鹿高校考古学部顧問時代の活動

原口長之・隈 昭志作成

年度	主な実施事項	部員中の三年生
24	○鹿央町下原甕棺調査 ○考古学部結成	藤実・近藤謙策・緒方雅吉・長戸礼子・服部斗司亮
25	○七城町三万田故増山末八氏蒐集による三万田出土品を貰いうける ○山鹿市志々岐故山田和三郎氏蒐集による志々岐牛草遺跡出土品を貰いうける ○山鹿市長沖貝塚遺物採集 ○山鹿市所在遺跡・史跡の調査 ○鹿本史談会創立に参加、本校において展示会開催	
26	○川辺小学校で土製の馬発見 ○菊水町葦田で田島家船庄屋文書発見 ○山鹿市南島甕棺調査 ○新山鹿大橋架橋工事中土器出土につき調査 ○植木町笠尾甕棺発掘	宮本常人・森山保男・今村憲子 深川義行・平川勝海
27	○山鹿市杉河童塚発掘 ○山鹿市城、馬塚古墳発掘 ○川辺小学校甕棺第二次調査 ○植木町亀甲 益田氏記録発見	隈昭志・阿蘇品保夫・松本義照・三 小田郷迪・福本淳一・西郷太 近藤誠之助・松本修一・吹原孝弘・ 宮田安親・松永敬護・林義人・広田 静代・福田弘子・松久みよ・荒木羊 子
28	○山鹿市石白塚古墳発掘	
29		
30		
8	11 11 11 8	9

												年度	主な実施事項	部員中の三年生								
33			32				31				30											
2	8	8	8	8	5	12	11	8	6	4	4	3	3	2	12	11	7	2	12	11		
○山鹿市方保田住居址と箱式石棺調査	○鹿央町壇の内甕棺調査	○鹿本町原部石棺発掘	○鹿本町御靈塚古墳調査	○鹿央町浦大間 舟形石棺調査	○鹿央町浦大間 家形石棺発掘	○山鹿市南本町下水工事で古銭多量出土、本校で貰いうける	○山鹿市南本町庄子透氏より庄太郎丸出土の銅鉢を貰い受ける	○鹿央町岩原 久保原石棺発掘	○鹿央町春間 桜の上横穴発掘	○鹿央町岩原 久保原石棺発掘	○鹿本町津袋 大塚古墳発掘	○山鹿市弁慶が穴古墳保護工事に伴う再調査 彫刻壁画・須恵器多数出土	○植木町伊知坊甕棺調査	○植木町伊知坊甕棺調査	○阿蘇郡一の宮町上御倉古墳調査	○宇土郡瀬貝塚発掘に参加	○下益城郡城南町 基九郎古墳発掘参加	○川辺小学校 甕棺第三次調査	○山鹿市南島 笠仏遺跡発掘（山鹿青年会議所後援）	○山鹿市南島 笠仏遺跡発掘（山鹿青年会議所後援）	○山鹿市南島 笠仏遺跡発掘（山鹿青年会議所後援）	○山鹿市南島 笠仏遺跡発掘（山鹿青年会議所後援）
山口敬助・富田金一・大林幸吉・近藤公子・戸上絃・名村登毛子・鍛ヶさえ・続紀久代・豊永靖子	寺本政親・阿蘇品陽之介・水本敏照・堀正明・牛川紀昭・三小田祐万・益田洋子・阿蘇品澄子	坂本昌子・原綱子	齊藤綽子・星子弘子																			

35											34							年度	主な実施事項	部員中の三年生	
2	1	12	12	7	7	3	2	2	1	12	11	11	9	9	5	4	月				
○菊鹿町下永野、今山箱式石棺調査	○菊鹿町相良、僧形神像（木像）発見	○植木町清水、伝習農場で再び藏骨器等調査	○植木町滴水甕棺群調査	○山鹿市鍋田、瀬口家文書発見	○山鹿市吉田帆足長秋写本発見	○城北史談会機関誌「石人」を月刊・活字印刷として発行をはじむ	○菊水町江田、土喰箱式石棺発掘	○山鹿市吉田・和鏡と古銭調査	○三加和町津田、伊勢原彌生式遺物包含地調査	○菊水町江田、江田甕棺調査	○熊日主催 肥後国分尼寺跡発掘に参加	○鹿央町寺米野吉井原甕棺発掘	○鹿央町持松、家形石棺三基発掘	○山鹿市蒲生、僧形神像発見	○鹿央町寺米野吉井原甕棺発掘	○山鹿市馬見塚、住居址調査	○植木町清水、伝習農場藏骨器調査	○鹿央町岩原、家形石棺発見	○山鹿市馬見塚、住居址調査	○植木町清水、伝習農場藏骨器調査	○山鹿市馬見塚、住居址調査
中川正隆・富田速美・隈恵美子・村上千鶴子・立花俊子・大瀬和江・山下宣子																	竹原勲・吉田孝介・矢住俊一郎・長瀬明子				

										年度	主な実施事項	部員中の三年生						
38					37						36	36						
3	1	8	8	7	3	3	2	11	10	10	8	8	3	11	11	8	7	6
○鹿本町中川隠れ切支丹墓発見	○植木町宮原、八保原石棺調査	○山鹿市方保田古墳発掘	○植木町那知で掛け仮発見	○山鹿市蒲生で隠れ切支丹位牌発見	○鹿本町小柳の隠れ切支丹墓調査	○山鹿市方保田清水山古墳発掘	○植木町吉松中学と同地区内の遺跡共同調査	○植木町那知で西南の役田原坂近戦記発見	○山鹿高校創立五十周年記念文化祭に参加	○菊池市の鳳儀山聖護寺武朝墓碑探訪	○山鹿市保多田石棺調査	○山鹿市津留迎田家文書発見	○菊水町寵門、天御子箱式石棺調査	○考古学部顧問	原口長之鹿本高校へ転任	島田英昭・星子福雄・森田純・羽広長彦・広田実・前村国広・浦部勇・黒田節代・北原やす子・原明子・深草洋子		
○鹿本高校郷土調査部と田底村宮原箱式石棺調査	○鹿本高校郷土調査部とチブサン古墳の墳形実測	○鹿本高校郷土調査部と山鹿市馬見塚所在古墳発掘	○鹿本高校郷土調査部と山鹿市白塚西古墳調査	○山鹿高校考古学部へ顧問として陳昭志、杉村彰一赴任	高宮衛司・戸上紘一・松本敬士・上妻信寛・弓掛節子	谷良太郎・森川鉛代・横手恵一・松葉久美子												

主な実施事項											年度		
41		40									39	月	
7	6	4	3	2	2	2	11	7	6	5	4	4	3
<ul style="list-style-type: none"> ○西合志町上生石棺調査 ○NHK「クラブ紹介」録音放送（ラジオ） ○植木町石川山古墳調査（県教育委員会主催） 	<ul style="list-style-type: none"> ○山鹿市椿井、御園石棺調査（鹿本農高と共同） ○山鹿市方保田、辻古墳発掘調査（第二高、鹿本高、鹿本農高共同） ○山鹿市西牧、西牧石棺群実測調査 ○山鹿高校文化祭 横穴墓の集成 ○山鹿市下吉田、カメ棺調査 ○植木町今藤 玄蕃塚実測 ○山鹿市鍋田、東鍋田繩文遺跡発掘調査 ○菊池郡西合志町 中原支石墓及び双子山遺跡調査 ○山鹿市小原 龍宮遺跡発掘調査 	<ul style="list-style-type: none"> ○七城町十連寺廃寺調査（熊日新聞主催） ○山鹿市小原横穴調査 ○山鹿市蒲田横穴調査（第二高、鹿本農高共同） ○部報チアサン創刊号発行 ○山鹿市椿井、御園石棺調査（鹿本農高と共同） ○山鹿市方保田、辻古墳発掘調査（第二高、鹿本高、鹿本農高共同） ○山鹿市西牧、西牧石棺群実測調査 ○山鹿高校文化祭 横穴墓の集成 ○山鹿市下吉田、カメ棺調査 ○植木町今藤 玄蕃塚実測 ○山鹿市鍋田、東鍋田繩文遺跡発掘調査 ○菊池郡西合志町 中原支石墓及び双子山遺跡調査 ○山鹿市小原 龍宮遺跡発掘調査 	<ul style="list-style-type: none"> ○鹿央町 桜ノ上横穴実測調査 ○鹿央町 岩原、寒原二号墳調査 	<ul style="list-style-type: none"> ○長岩横穴墓群実測調査（石人石馬研究会主催） ○山鹿市制十周年記念文化祭に参加（鹿本高校と共に） ○鹿央町 桜ノ上横穴実測調査 ○鹿央町 岩原、寒原二号墳調査 	<p>原口克己・前川英利・高木憲二・竹下成一・井上啓・星子雅英・松本健郎・石原雄二・宇野博明・井寺ひろ子・大塚由美子・近藤ますみ・竹田信子</p>	部員中の三年生							

主なる実施事項												年度										
部員中の三年生												41										
42												41										
1	1	12	12	12	11	11	8	7~8	5	5	4	3	3	2	2	1	12	9				
○山鹿市方保田、方保田古墳二次調査	○山鹿市櫻町遺跡発掘調査	○九州自動車道調査（鹿央地区）	○同調査（南関、北部地区）	○山鹿市櫻町遺跡発掘調査	○西合志町石立石棺実測調査	○山鹿市城松ノ木原叢棺調査	○西合志町 双子山遺跡測量調査（西合志町教育委員会）	○七城村 町畠遺跡発掘調査（七城村教育委員会）	○山鹿市城 付城横穴墓実測調査	○山鹿市小原、大塚石棺発掘調査	○菊鹿町鞠智城第一次調査（県教育委員会）	○山鹿市志々岐牛草遺跡調査（山鹿市教育委員会）	○山鹿高校最後の文化祭「住居と墓」展示	○西合志町、阿彌陀面及び巡畠試掘調査	○山鹿市鍋田、西原遺跡調査	○山鹿市白石 白石地区調査	○鹿央町向原 向原石棺群調査	○鹿央町持松 塚原古墳測量	○鹿央町持松石棺実測調査	○山鹿市熊入北原台地開田工事調査（山鹿市教育委員会）	○山鹿市白石	瀬哲司・吉田直美・矢野千恵子・上村照子・中村房子・広瀬明美・森保代・林田恵子・岡本慎子・野中淑子・堤紀美子・寺田富士子・竹村英子・浜田好美・米加田幸子・野中孝子・石原恵美子・松葉敏美
○鹿央町持松 塚原古墳測量	○鹿央町向原 向原石棺群調査	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	○山鹿市白石	瀬哲司・吉田直美・矢野千恵子・上村照子・中村房子・広瀬明美・森保代・林田恵子・岡本慎子・野中淑子・堤紀美子・寺田富士子・竹村英子・浜田好美・米加田幸子・野中孝子・石原恵美子・松葉敏美			
河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	河口順子	瀬哲司・吉田直美・矢野千恵子・上村照子・中村房子・広瀬明美・森保代・林田恵子・岡本慎子・野中淑子・堤紀美子・寺田富士子・竹村英子・浜田好美・米加田幸子・野中孝子・石原恵美子・松葉敏美		

六、原口長之先生著作・論文一覽

松本健郎作成

- 「熊本県山鹿市大字城 馬塚古墳調査報告」熊本県立山鹿高校
山鹿市 昭和三十年
- 「白塚古墳調査報告」熊本県立山鹿高校 昭和三十一年
- 「弁慶が穴古墳調査報告」熊本県立山鹿高校 昭和三十一年
- 「鹿本町の古代文化—御靈塚古墳を中心として」『かもと』第十四号 鹿本公民館 昭和三十一年
- 「裝飾古墳弁慶方穴調査報告」『熊本史学』第十一号 熊本史学会 昭和三十二年
- 「熊本の歴史」熊本日日新聞社 昭和三十三年 分担執筆
- 「熊本県千田石棺群調査概報」熊本県立山鹿高校 昭和三十四年
- 「熊本県千田石棺群調査報告」『九州考古学』第七・八号 九州考古学会 昭和三十四年
- 「古墳石人の行方」『東方古代研究』第九号 東方古代研究会 昭和三十四年
- 「亀の子と土偶」『日本談義』三十五卷十号 日本談義社 昭和三十五年
- 「肥後の須恵器の編年試案」『西日本史学会十周年記念論文集』西日本史学会 昭和三十五年
- 「江田土喰箱式石棺調査報告」『石人』一卷一号 城北史談会 昭和三十五年
- 「筑肥山地と菊鹿盆地」『熊本県の地理』日本地理集成第三卷 光十九年
- 「山鹿市上吉田出土の連波水草双雀鏡について」『石人』一卷二号 城北史談会 昭和三十五年
- 「凡道寺所蔵の經筒について」『石人』一卷三号 城北史談会 昭和三十五年
- 「珠文鏡を出土した久保原石棺」『石人』一卷九号 城北史談会 昭和三十五年
- 「石棺編年上における蒲鉾形石棺の位置」『石人』一卷九号 城北史談会 昭和三十六年
- 「金栗瀬助翁の記録」『石人』三卷一号 城北史談会 昭和三十七年
- 「金栗瀬助翁の記録」『石人』三卷二号 城北史談会 昭和三十七年
- 「明治十年戦争・田原坂近戰記」『石人』三卷十一号 城北史談会 昭和三十七年
- 「熊本県山鹿市方保田古墳調査報告」『九州考古学』第十四号 九州考古学会 昭和三十七年
- 「肥後・菊池川流域」『古代学研究』第三十号 古代学研究会 昭和三十七年
- 「菊池川の話」『石人』四卷八号 城北史談会 昭和三十八年
- 「城北史話」一『石人』四卷十号 城北史談会 昭和三十八年
- 「城北史話」二『石人』五卷二号 城北史談会 昭和三十九年
- 「山鹿市川辺校区の古碑」『石人』五卷四号 城北史談会 昭和三十九年

文館 昭和三十九年

「裝飾古墳」平凡社 昭和三十九年 分担執筆

「古墳壁画」日本原始美術第五卷 講談社 昭和四十年 分担執筆

「古墳文化」熊本県史総説編 熊本県 昭和四十年 分担執筆
「火葬墓としての小型横穴」『熊本史学』第二十九号 熊本史学会 昭和四十年

「小型横穴は火葬墓ではないか」『九州考古学』第二十五・二十六号 九州考古学会 昭和四十年

「九州における装飾古墳とその背景」『二校研究紀要』第一集 熊本県立第二高校 昭和四十一年

「舟葬説についての一考察」『二校研究紀要』第一集 熊本県立第二高校 昭和四十二年

「ある集落の発生を探る」『日本談義』四十二卷二号 日本談義社 昭和四十二年

「石川山古墳群調査報告」熊本県教育委員会 昭和四十三年 分担執筆

「猿と馬と河童と」『石人』九卷一号 熊本史談会 昭和四十三年

「隠れ切支丹・行長どんの墓」『石人』九卷三号 熊本史談会 昭和四十三年

「上田仙太郎」『石人』九卷八号 熊本史談会 昭和四十三年

「上田仙太郎」『石人』九卷九号 熊本史談会 昭和四十三年

「片瀬淡」『石人』十卷八号 熊本史談会 昭和四十四年

「本妙寺の顕写会」『石人』十卷八号 熊本史談会 昭和四十四年

「古代文化の保護」『日本談義』四十四卷五号 日本談義社 昭和四十四年

「県下の装飾古墳を点検する」『日本談義』四十七卷十号 日本談義社 昭和四十七年

「肥後琵琶貝書(上)」『日本談義』四十八卷八号 日本談義社 昭和四十八年

「肥後琵琶貝書(中)」『日本談義』四十八卷九号 日本談義社 昭和四十八年

「肥後琵琶貝書(下)」『日本談義』四十八卷十一号 日本談義社 昭和四十八年

「減びゆく肥後琵琶貝とその保存対策」『ふるさとの自然と歴史』第三十四号 ふるさとの自然と歴史を守る会 昭和四十九年

「熊本県の装飾古墳白書」熊本県教育委員会 昭和四十九年

「田ノ川内古墳第一号」『日本考古学年報』第二十六号 日本考古学会 昭和五十年

「熊本の装飾古墳」熊本日日新聞社 昭和五十一年 分担執筆

「明治三十九年メキシコ移民の記録」『石人』十九卷七号 熊本史談会 昭和五十三年 共著

「新・熊本の歴史」第一卷(古代・下)熊本日日新聞社 昭和五十四年 分担執筆

「北部町史」熊本県飽託郡北部町 昭和五十四年 責任編著

「江田船山古墳」熊本県玉名郡菊水町 昭和五十五年 共同編著

「山鹿の文化財」山鹿市立博物館 昭和五十六年 責任編集

「手漉き和紙調査報告書」熊本県 昭和五十六年

「植木町史」熊本県鹿本郡植木町 昭和五十六年 責任編著
「熊本県大百科辞典」熊本日日新聞社 昭和五十七年 共同編著
「西南戦争從軍日記 第二集」『石人』二十三卷一号 熊本史談会
昭和五十七年
「西南暴動岐記 西南戦争の記録」『石人』二十四卷五号 熊本史
談会 昭和五十八年 校訂
「遠山弥次郎と蒲生の溜池」『石人』二十五卷五号 熊本史談会
昭和五十九年
「肥後の国学者・杉谷參河」『石人』二十五卷五号 熊本史談会 昭
和五十九年
「國学者 帆足長秋と京」熊本史談会 昭和五十九年 責任編著
「熊本県裝飾古墳総合調査報告書」熊本県教育委員会 昭和五十
九年 分担執筆
「山鹿市史」熊本県山鹿市 昭和六十年 責任編著
「西南の役從軍記」一、「石人」二十六卷七号 熊本史談会 昭
和六十一年 共著
「西南の役從軍記」二、「石人」二十六卷十二号 熊本史談会 昭
和六十一年 共著
「角川日本地名大辞典」第四十三卷（熊本県）角川書店 昭和六
十二年 編著
「熊本の裝飾古墳」『港湾』六十四・一五 日本港湾協会 昭和六十
二年
「鹿央町史」熊本県鹿本郡鹿央町 平成元年 責任編著
「肥後琵琶覺書」一・二・三 「石人」三十卷二号 熊本史談会 平

成元年
「肥後琵琶覺書」四 「石人」三十卷四号 熊本史談会 平成元年
「肥後琵琶覺書」五 「石人」三十卷五号 熊本史談会 平成元年
「肥後琵琶覺書」六 「石人」三十卷六号 熊本史談会 平成元年
「肥後琵琶覺書」七 「石人」三十卷七号 熊本史談会 平成元年
「肥後琵琶覺書」八 「石人」三十卷八号 熊本史談会 平成元年
「肥後琵琶覺書」九 「石人」三十卷九号 熊本史談会 平成元年
「肥後琵琶覺書」十 「石人」三十卷十号 熊本史談会 平成元年
「肥後琵琶覺書」十一 「石人」三十卷十一号 熊本史談会 平成
元年
「肥後琵琶覺書」十二 「石人」三十卷一号 熊本史談会 平成
元年
「肥後琵琶覺書」十三 「石人」三十卷二号 熊本史談会 平成
元年
「肥後琵琶覺書」十四 「石人」三十卷三号 熊本史談会 平成
元年
「肥後琵琶覺書」十五 「石人」三十卷四号 熊本史談会 平成
元年
「肥後琵琶覺書」十六 「石人」三十卷五号 熊本史談会 平成
元年
「肥後琵琶覺書」十七 「石人」三十卷六号 熊本史談会 平成
元年
「肥後琵琶覺書」十八 「石人」三十卷七号 熊本史談会 平成
元年

「肥後琵琶覚書」十九」「石人」三十一卷八号	熊本史談会	平成	成三年
「肥後琵琶覚書」二十」「石人」三十一卷九号	熊本史談会	平成	成三年
「肥後琵琶覚書」二十一」「石人」三十一卷十一号	熊本史談会	平成	成四年
「肥後琵琶覚書」二十二」「石人」三十一卷十二号	熊本史談会	平成	成四年
「河内町史」熊本県飽託郡河内町	平成二年	分担執筆	成四年
「肥後琵琶覚書」二十三」「石人」三十二卷三号	熊本史談会	平成二年	成四年
「肥後琵琶覚書」二十四」「石人」三十二卷四号	熊本史談会	平成二年	成四年
「肥後琵琶覚書」二十五」「石人」三十二卷六号	熊本史談会	平成二年	成四年
「肥後琵琶覚書」二十六」「石人」三十二卷七号	熊本史談会	平成二年	成四年
「肥後琵琶覚書」二十七」「石人」三十二卷八号	熊本史談会	平成二年	成四年
「肥後琵琶覚書」二十八」「石人」三十二卷九号	熊本史談会	平成二年	成四年
「肥後琵琶覚書」二十九」「石人」三十二卷十号	熊本史談会	平成二年	成四年
「肥後琵琶覚書」三十」「石人」三十二卷十一号	熊本史談会	平成二年	成四年

※「石人」にはこの他にも多くの論考があるが、多數におよぶため、主要なもののみを抽出した。

「装飾古墳」熊本県立装飾古墳館 平成五年 責任編著

七、最後の論文

舟葬説についての一考察

—熊本県菊池川流域の場合—

原口長之

小序

- 1 民俗学の立場から
- 2 考古学における舟葬説の経過
- 3 舟葬觀念成立の時期について
- 4 岩原横穴墓と小原大塚横穴墓
- 5 舟葬説と古墳壁画
結び

びたび達着した。これについては、すでに小論を発表したこともあるが、本館で研究紀要を初めて発行するに当り、これを機会に改めて、わが國古代における舟葬觀念の存在について纏めておきたいと思うものである。

一 民俗学の立場から

大林太郎氏の「葬制の起源」によれば、舟葬はボリネシアではサモア、ニュエ、フィジー、ニュージーランド、チャタムの諸島、ミクロネシアではヤップ、ヌル、トビ、ソンゴソル、メリアル、ブルの諸島、メラネシアではセント・ジョージア海峡、ニューブリテン島のガゼル半島東岸、ブカ、ブーゲンヴィル島海岸、カニエトに分布し、東南アジアではニコバル島民、ニアス、スマトラのバタク族、セレベス、ニモールなどの例があるとされる。といふことはわが國の南方海域に舟葬が広く行われていたということである。

ここで日本人の原郷土の問題について取り上げる余裕はないが、原郷土の有力な説の一つとして南方説があることを想起したい。

日本においてはどうか。松岡静男氏は万葉集卷十六（三千八百八十八）の

おきつ国しらさむ君がしめ屋形

を解して、冥界の主となるべき貴人の遺骸をのせた舟が幽すいな

しかし、私はこの三十数年来、装飾古墳に关心をもつて、その壁画の集成を手がけ、横穴墓等を調査しているうちに舟葬觀念のかなだの祖先の國、死者の國に送り帰そうとする習俗であるが、この觀念がわが國古代にもあつたかどうか、民俗学者はともかくとして考古学者の間では後述するような経過をたどつて否定的な意見が多い。

存在を是認しなければ解釈のつかないような構造ないし図柄にた

集卷九（一千八百七）の

勝鹿の真間娘子を詠む歌一首

：波の音の 驚ぐ瀬の 奥津城に 妹が臥せる

遠き代に ありける事を 昨日しも 見けむが

如も 思ほゆるかも (歌は筆者捕記)

これも水葬を歌つたものであるとされる。^①

大祓詞によると、人間の犯したくさぐさの罪穢は

：高山の末 短山の末より佐久郡太理に落ち多岐つ 速川の瀬

に坐す瀬織津比売といふ神 大海原に持ち出でなむ 此く持ち出

で往なば 荒潮の八百道の八潮の八百会に坐す速開都比売という

神持ち加加呑みてむ 此加加呑みてば 気吹戸に坐す氣吹戸主と

言ふ神 根国・底国に氣吹き放ちてむ 此く氣吹きて放ちてば

根国・底国に坐す速佐須良比売といふ神・持ちさすらひ失ひてむ

斯く失ひてば：罪という罪は在らじと…

すなわち人間の罪穢は川の神・瀬織津比売→海の神・速開都比

売→気吹戸主→根の國・速佐須良比売へとリレー式にはこぼれて

消されるという、この大祓の詞から古典に出てくる死後の世界、

根の國は海のかなたにあつたと松前氏は主張される。^②

以上代表的な三つの説をあげたが、このほかに柳田國男氏の「海上の道」、松本信広氏の「天の鳥船」説などがあつて、民俗学上で舟葬観念の存在は承認を得ていいといつてよい。

ただ、ここに挙げられるような習俗は、いつの時代まで遡り得るかという点に問題がある。万葉集にても、大祓詞にしても、それが作られた時点においては確かに舟葬観念の存在を認め得る。従つて、それ以前にも行わっていたに違いないと想像するが、で

はその時点からどれだけ週り得るかという問題がある。

二 考古学上における舟葬説の経過

考古学の立場から、はじめて舟葬説を提唱したのは後藤守一氏である。氏は西都原出土の埴輪舟に関連して次のように述べられた。^③

①わが国上代の埋葬施設の中に舟形の棺に遺骸をおさめたものが多いこと。舟形棺とともに舟形石棺はその形制が独木舟に酷似していること。

②北史倭人伝に、わが国上代人の間に行なわれた葬法について「及葬置屍船上、牽之或以小舟」と記してあり、これは明らかに當時舟葬が行なっていたことを示すものである。

③舟葬のほかに家葬も行なれ、舟葬は家葬よりも古く行われ、古墳時代後期になつて家葬が一般的になつた。

④後世「入棺」のことを「舟入」とよび石上神社における御神体奉安の「御舟代」など上代を余韻を残すものである。

これにたいして、伊東信雄氏は次のように反駁した。^⑤

①舟形石棺は舟を象つて作つたとしなければならぬ程、独木舟に似ているだろうか。自分はそうは思はないとして両者の相違を鋭く批判した。鋸が発達していないため板で舟をつくることができず、クリヌキ細工がおこなわれた。人の屍体をいれるに足る長さに丸木をクリヌいて棺箱をつくるとすれば木舟のごとく見えるのは当然である。舟形石棺の起源は格別の意味をもつたものではなく当時の大形の箱としての一般的な

形であつたに過ぎない。

②北史倭人伝の「及蓋置屍船上」の場合の舟は当時のわが国に渡來した支那人が、このクリヌキ棺を見て、舟そのものと考

えて書いたものである。

③舟葬のことを舟入といふのは、ふねということは必ずしも

舟のみを意味するのではなく酒漕(さかぶね)・湯漕(ゆぶね)などの用語の示すように容器を示すものであるから舟入とは箱入即舟葬の意味を示すもので、何等舟葬説を支持するものではない。

一九四六年には京都大学の小林行雄氏が大阪府南天平塚や黄金塚で剖竹形木棺の前後に円板をあてた例があることなどを指摘し舟葬説への疑問を表明された。^④

こうして後藤守一氏の発言は否定されたまま現在に及んでいる。一九九二年五月発行された日本考古学用語辞典にも著者の齊藤忠氏は「日本古代において実際舟葬があつかは明らかでない」として否定的な見解を述べておられる。^⑤

三 舟葬観念成立の時期について

今まで舟葬説についての経過を過剰と思われるまで辿つて来たが、その理由は後藤、伊東両氏が立論の重要な根拠とされたことが舟形石棺にあつたということを確認したいためであつた。

舟形は石棺にしろ木棺にしろ古墳時代前期の後半から中期にわかつて行われたものであることは一般の承知するところである。^⑥しかして、この時期が果して舟葬説を成立せしめるにふさわしくはない。

今までに来世觀。他界觀が成熟していた時期と言つてよいものかどうかについて検討する必要がある。

古墳時代における葬送觀念の推移について学界の通説を要約すると、次のように言うことができよう。

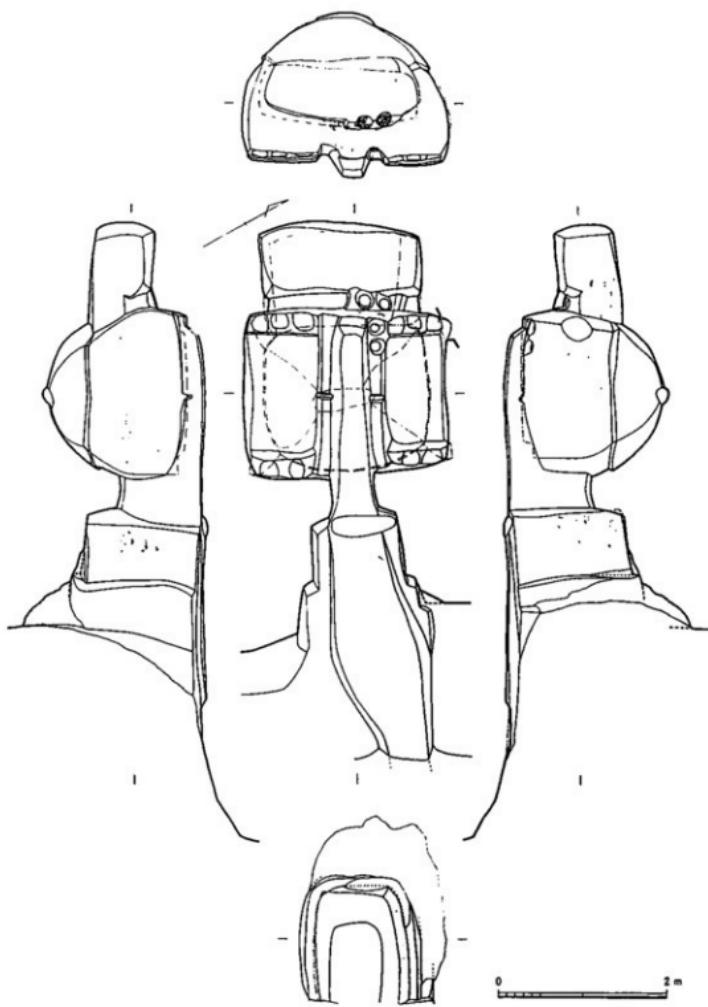
前期においては生と死の区別がまだ明瞭でなく、死とは靈魂が肉体から離れるためにおこるのであるから呪術・鎮魂の法で遊離した魂を引き戻せば肉体は蘇生すると考えられた。従つて葬送の礼儀はもっぱら靈魂の処理を中心に行われ、死後の世界についての觀念はなかつた。

中期中葉ごろから次第に今までと違つた考え方が生まれて米た。死者は死後においても現世とおなじ生活を営むものであるとする新しい觀念が発生した。

後期になると、はつきりと死後の世界が確立される。横穴式石室が急速に普遍化し、從来の鎮魂的・呪術的副葬品にかわつて馬具・土器類・各種の金銅製品など死後の生活における実用的なものが目立つてくる。石室は広大となり、二室、三室をそなえたものまであらわれ黄泉の國で死後の生活を営むにふさわしいものとなつてくる。

それが地下にあるにせよ、天上にあるにせよ、また海のかなたにあるにせよ、とにかく死後の世界についての觀念が成熟して来たのは後期の時代である。

とすれば、まだ他界觀念の未成熟な前期末～中期の埋葬施設である舟形石棺に舟葬説の成立を期待するのは無理であつて、舟葬説の成立は、時期を下して古墳時代後期にもつていくべきであ



岩原1-14号横穴墓実測図
(「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より)

ると考える。

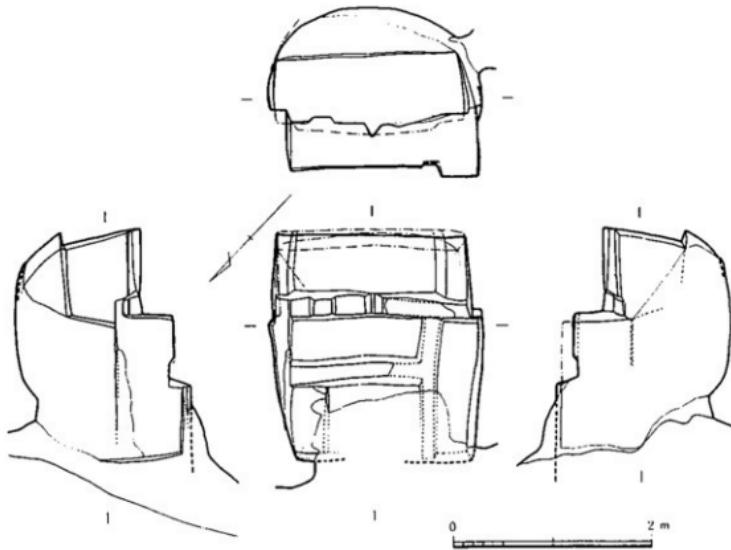
四 岩原横穴墓と小原大塚横穴墓

前者は鹿本郡鹿央町大字岩原に、後者は山鹿市大字小原にある。

山鹿・隈府盆地の西を限る台地に岩原台地と志々岐台地がある。この二つの台地は春間一長岩の低地をあいだにはさんで南北に対向している。どちらも台地の裾は阿蘇溶岩の絶壁となっていて、その絶壁に横穴墓群が開口する。岩原台地がわに岩原横穴墓群百三十一基、浦田横穴墓群五基、志々岐台地がわに長岩横穴墓群百二十二基、小原大塚横穴墓群百四基がある。これらの四群はともに、その中に彫刻の装飾をもつ横穴墓を交えている。

ここで取り上げようとする横穴墓は岩原横穴墓群中の第一一十四号墳である。

第一一十四墳は阿蘇溶岩の崖面、平地から約十mの高さのところに南東にむけて開口している。羨道・羨門・主室より成る。主室の床面形は開口約二・五m、奥行約二・九mの矩形をなす。床面から天井までの高さは、最高の部位で約一・五m、天井はドーム形をしているが屋根をかたどつて屋根と四壁との境を示すための段がのこり、羨道と直角の方向に棟を刻んであり、寄棟平入の屋根を意識して構築されている。



小原大塚93号横穴墓実測図
(「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より)

る。

奥壁の屍床は一段高く設けられ、屍床の前面の縁に二個の突起が造り出している。突起の直径は脚部で二十一cmと二十cm、上面の直径はどちらも約八cm、立ち上がりが十cmある。開口が古く遺物の伝わるものはない。

小原大塚横穴墓群中これと類似の横穴墓がある。この横穴墓群は総数四百四基あり、その中の第九十三号がそれである。地上約五mの崖面に西にむかって開口する。落盤によつて羨道、羨門を失い主室だけが残っている。

主室の床面形は間口約一・九mで、大体において正方形をしている。屍床は羨道と直角の方向に一面ないし三面あつて、奥壁ぞいの屍床をもつとも高く造り、階段状に一面ずつ下げて造る。

床面から天井までの高さは最高の部位で約一・五m。天井はまろみを持つているが、やや扁平で四壁と天井部の境を示す段は殊に大きくなっている。棟の方向を示す天井の刻みはない。

奥壁ぞいの、もつとも高いところに造られている屍床の前面の縁に岩原第I—十四号と類似する突起がある。突起は一個で脚部の直径二十五cm、上面の直径二十三cm、立ち上り五cmで角堵に近い感じである。なお、岩原も小原大塚横穴墓も、奥壁ぞいの突起をもつ屍床の前面の縁（区切り）はあたかもゴンドラ形の舟を思わせるように両端が反り上つている。

さて、上述の突起は何を意味するものであろうか。

私ははじめ、岩原横穴墓でこの突起を発見した瞬間に西都原出土の埴輪舟における橹膳（欄腰）を想起した。かつて京都大学の梅

原末治氏が熊本県石貫村穴観音横穴墓の屍床を敍して、「舟形若しくは長き回字形という可き縁を附せり」と言われたように屍床の縁は、ゆるやかに両端のそりあがった舟形をしている。そしてその縁の右よりに突起がある。いかにも橹膳（欄腰）にふさわしい位置である。

しかし、この突起を直ちに西都原の埴輪舟と結びつけることは無理である。西都原の場合は準構造船もしくは構造船とよばれるべきもので、岩原、小原大塚などの遠く及ぶところではない。とすれば何と解釈すべきであろうか。

死者を祭る灯明皿をのせる台とするか。福岡県王塚古墳^④に奥壁に接して二人用の屍床があつて、その前面左右に整然と灯明台が立つてゐる。しかし、岩原の場合、突起が灯明台であるとするためには、突起の上面が灯明皿を置くに適するよう平坦であることが必要であろう。然るにこの突起の上面は尖るとまではいわないまでも平坦で灯明皿をおくに適する状態にあるとは決して言えない。

また灯明台が二個ということであれば王塚古墳におけるよう、ほどよい場所に左右相整うように配置するのが普通であろうと思われるが、この二個の突起は屍床の右側に偏している。灯明台としては不適当であろうと思う。

次に考えたのは排水溝の切り残しが突起として残存したのかも知れないということである。横穴墓の屍床の縁に排水のための溝が刻みこまれているのはよく見かけるところであるが、その場合の排水溝は主室内の中央に設けられた羨道に流れ込み、それが羨門外に導かれるというのが通例である。そうしないと折角の水が下の段の屍床に流れこむということになりかねないからである。

また排水溝とすれば二個の突起をはさんで二か所も溝を掘る必要はない訳である。

以上の点からこの突起は舟の橹臍を意識してつくり出したものであるとして差支えなかろうと思う。

小原大塚横穴墓における突起は岩原の場合どちらがって断面は角場に近く上面は灯明皿をのせ得る平坦さをもつてゐる。しかしこの場合、玄室内の屍床の配置が問題になる。一面り三面の屍床は羨道に対して直角の方向に並列して設けられていて参道がない。奥壁上段の死者を祭るために他の遺骸を踏みこえて行かないければならぬという不都合がある。灯明台が必要であるとすれば羨門附近又は羨道に設けるのが当然であろう。突起が低く、角場に近くなり、形式化しているけれども橹臍の退化形態とすべきであろうと考える。

以上の解釈のもとに、この施設こそは舟葬観念の存在を立証する最も有力な証拠であると信する。

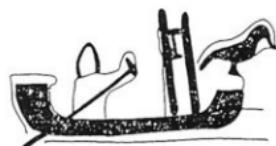
五 舟葬説と古墳壁画

前項において横穴墓における屍床の突起が舟葬観念の存在を立証するものではないかということについて述べたが古墳壁画の中にはこれを支援する文様がいくつかある。

熊本県山鹿市弁慶が穴古墳のような罔柄がある。被葬者の葬送時の情景を描いたものであろう。これを舟上に柩をおき、その柩におさめられた死者の魂を象徴する鳥を柩にとまらせたと解するならば卜方の馬と舟は殉葬或いは副葬品として解釈するこ



熊本・弁慶が穴壁画



福岡・珍敷塚壁画



福岡・鳥船塚壁画

とも容易である。被葬者の靈魂を象徴する鳥の概念については書紀における日本武尊の白鳥三陵の神話も想起されて興味が深い。¹¹⁾ 福岡県の珍敷塚古墳の罔柄は森貞次郎氏がいわれるよう、「神話の天の鳥船を思わせる船、太陽、月などの絵画は死者の靈を死後の世界に送り安住させようとする葬送儀礼の表現であり、死者に対する永遠の生活の安息のための供獻でもあつたろう」¹²⁾ とされるものである。

同じく吉井町にある鳥船塚の壁画は「船の舳艤の両端には船の方向を向いた鳥がとまっており、船上には艤より櫂をあやつる人物がいる。船上の両端に高い建てものがあるのは帆とみるよりも、幡をあらわすとみた方が適切であろう」とされる。

この他にも古墳壁画における舟の罔柄は多い。齊藤忠氏は舟の罔柄として二十五例をあげられたが、この中で鳥や帆（荷）は添えないまでも舟葬の意を托したものかも知れないと思われるもの

がある。最近発見された熊本県小原大塚横穴墓においては、漢道に側壁にゴンドラ形の舟を大きく陰刻している。熊本県玉名市ナギノ横穴墓第十号の石屋形の屋根には船の形が刻んである。それらの図柄は、その存在する場所から言つて葬送のための図柄であると考えられる。

以上の壁画はいずれも舟葬概念の存在を物語るもので、殊に弁慶が穴古墳のとき隋書倭國伝の記事そのままの情景を示していると言えよう。

これらの壁画をもつ古墳はいずれも巨石使用の横穴式石室であつて、古墳時代後期に属するものであり、岩原、小原大塚の横穴墓群が後期終末期のものであることは言うまでもない。

以上のことから古墳時代後期には舟葬概念が成立していたことを確言できよう。それが認めらるれば第一項で紹介した民俗学上の事例ともさほど無理なく結びつくことが可能である。

ただことわっておかねばならぬことは、舟葬概念がわが国上代の風習の一般であったと言おうとするものではないと云うことである。現在のところ古墳時代後期、北部九州または、中九州に点在していたと言つておかねばならないからである。今後の資料の増加によつて或いは西日本の太平洋沿岸にまで点々とのびるかも知れないとは考えている。

結び
この小論は舟葬成立の時期を古墳後期までさげることによつて從来の論争点をはずし、民俗学の成果を念頭におきながら横穴墓

屍床の突起と古墳壁画の解釈をもとに、一度否定された舟葬説の復活をはかるとしたものである。所期の目的を達し得たかどうかを懸念するが、先学の御叱正を得てその補強を期したい。

①松岡靜男「太平洋民俗誌」同「日本古俗誌」

②松前健「日本神話的新研究」

③後藤守一「西都原発掘埴輪舟 その二」考古学雑誌第二十

五卷第九号

④伊東信雄「日本上代舟葬説への疑問」考古学雑誌第二十五

卷第二号

⑤小林行雄「日本古墳の舟葬説について」西宮第三号

⑥齊藤忠「日本考古用語辞典」

⑦日本考古学協会編「日本考古学辞典」

⑧道書があるが世界考古学大系3所収の龟井正道氏「信仰から礼儀へ」を参照した

⑨浜田耕作・梅原末治「石貫村穴観音横穴」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第四冊

⑩梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」京都帝國大学文学部考古学研究報告第十五冊

⑪原口長之「装飾古墳弁慶が穴調査報告」熊本史学第十一号
⑫森貞次郎「珍敷塚古墳」装飾古墳所収 図文の挿図は斎藤忠「古墳壁画」日本原始美術五によつた
⑬森貞次郎「鳥塚古墳」以下同上
⑭斎藤忠「古墳壁画」日本原始美術五

⑮浜田耕作・梅原末治「石貫村ナギノ横穴群」前掲書

八、シンボジウム「よみがえる装飾古墳」の開催

——先生と共に励んだ日々——

桑原憲彰

あれは確かに、平成五年一月頃の事であつたろうか。鹿児町の企画観光課長の小原さんが、「今年の県民文化祭では是非、当鹿児町で全国装飾古墳シンボジウムを開催したいので、全面的に協力をお願いしたいのですが」と打診に来られた時、「それは頗つてもないこと、是非やりましょう。」と全面協力を約束されたのは、館長の原口先生であった。先生は、以前から「今年は、全国的に著明な学者を招聘して、是非、鹿児町で装飾古墳シンボジウムを行いたい」と漏らしておられたのである。

私自身、その必要性を感じてはいたものの、まだ当館が開館して二年目で、その基礎づくりに奔走している多忙の時期だったこともあり、開催に消極的であつた私に先生は、「桑原君、いい機会じゃないか。是非成功させよう」と積極的に行動を開始されたのである。私も館長の情熱に引きづられるようにして、やつと重い尻を上げたのであった。この先生の情熱がなかつたら、シンボジウムの開催も覚束なかつたであろう。その後先生は、小原課長それに私を加えた三人で度々打ち合わせを実施され、準備を軌道に乗せられたのであった。小原課長・森係長・私の三人を、愛知県の春日井市で行われた「春日井シンボジウム」に派遣して、その

実際を体験させられたのも先生の計らいであった。

また、シンボジウムの期日も、平成五年十一月二十日・三日と決定され、準備も鹿児町を挙げての実行体制がとられた。そしてシンボジウムは、第六回県民文化祭事務局、鹿児町、装飾古墳館の三者の協力体制のもと、二日間にわたって実施され、天候にも恵まれ、約九百人の参加者のもと、成功裏のうちに終了したのであつた。

その後、先生は「シンボジウムはやり放しては意味ないです。結果を活字にして、残さなければ開催した意味がない」と言われ、シンボジウムの内容を本として残すことを積極的に進められた。このシンボジウム記録文（平成七年発行）に掲載されている館長自身の基調報告「装飾古墳の三つのタイプとその背景」の内容も、一番に目を通され、校正も早い時期に終了されたのであった。

このように、装飾古墳

シンボジウムに積極的に

取り組んで来られた原口

館長も安心されたのか、

昨年の四月三十日「後が

ない。やり残した仕事が

沢山ある。今から人生の

総纏めをしなければ」と

第一線を退かれ、推され

て装飾古墳館の名譽館長

に就任された。そして、



シンボジウム「よみがえる装飾古墳」の全体討議で
発言される先生

九月十一日、だれもが予想も

とだつた。

「いやあ、行くのはいいですが、皆が先生の話を聞きたいから

講師依頼でしょう。私が行ったのでは、皆ガッパリしますよ」。こ



シンポジウム來熊時に館でくつろがれる先生方、
より原口長之・齊藤忠・森浩一・李殷昌の各先生
方右側

月後の事であつた。思えば、
先生が心待ちにされていた本
の完成を見すに逝去された事
に、深い悲しみを覚えると同

時に、返すがえすも残念でな
らない。今後、再び先生のお
姿やお声に接する事はないが、

先生最期のこの本の語り言葉
の中に、館長は何時も生きておられると考え、自ら慰めている。
それにも先生とのお別れが、このような形で、こんなに早
く訪れるとは思つてもいなかつた。先生と共に、装飾古墳シンボ
ジウムの成功に向けて頑張った一昨年の明るい秋の日々が、今と
なつては懐かしく思い出される。

十年間、ある時は担任の先生として、またある時は社会科担当の
指導主事、そして同じ高校教師の大先輩として、また装飾古墳館
では直属の上司として絶え間なくご指導を仰いだ恩師であつた。

もちろん、教育者として、学者として偉大な方であり、尊敬の
念を一時たりとも忘れたことはなかつたが、それ以上に、私は先
生の人柄が大好きだつた。

高校に入学して、先生の書かれた幾多の著作に接したとき、そ
の文章に盛られたロマンチズムとリリシズムに、鳥肌の立つほ
どの感動を覚えた。「ああ、こんな文章が書けたらなあ」という憧
憬(どうけい)にも似た気持ちを、その後ずっと抱き続けてきた。
メールリンクの「青い鳥」を例にとりながら、「亡くなつた人
は、思い出すことによってその人の心の中に蘇(よみがえ)つて
くる。だから僕は、自分がこの世に生きたあかしとして本を書い
て残すよ。僕が死んでも、

後世、本を読んだ人の心
の中に僕が蘇つてくれれ

「微熱が続いて、体の調子がよくないので、九月十日の鹿本高校
同窓会福岡支部の記念講演に、僕の代わりに行つてくれないか。」そ
恩師の原口長之先生から依頼を受けたのは、確か八月二十二日のこ

桑 原 恵 彰



40代後半の先生
(山鹿高校図書館にて)

ば、こんなにうれしいこ
とはないじゃないか。」そ
のような話をされたのは、
確かに先生が四十歳、私が

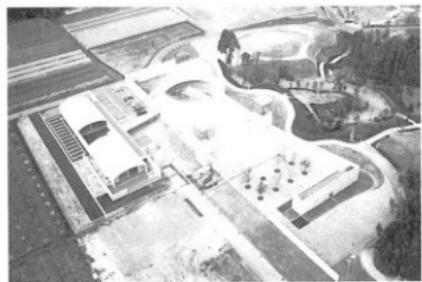
十六歳のことだった。先生が亡くなられた今、あの時先生は、時の流れのなかで滅びゆく個々の生命のわびしさ、哀れさを考えておられたのではないかと思う。当時私たちは若く、まだ未米がたくさんあった。先生の考え方すべてを理解することはできなかつたが、深い共感を覚えたのが、昨日のことのように思い出される。

先生の考えは、その後実行された。月刊雑誌「石人」は、昭和三十四年一月の創刊号から一号の欠本もなく、今年の九月号まで、実に三十五年の長きにわたって発行され続けた。そこに盛られた郷土史関係の資料たるや膨大なもので、まさに昭和の「肥後国誌」ともいえよう。そして、先生を慕う熊本史談会千三百人の会員がこれを支えてきた。



5万人目の入館者へ記念品の贈呈（平成4年）

さて、先生との約束の九月十日が来た。私は、先生の病状を気遣いながら福岡に向かった。会場のホテルには、例年以上に同窓生諸氏が多数詰め掛けていた。先生の話を聞くためというより、先生に会いたかったためであろうと思われた。福岡在住の考古学部OBも、ほとんどが顔をそろえていた。代理で私が行つたため、落胆した人もいたかも



竣工なった実習棟（左手建物）と装飾古墳館本館
(平成6年12月5日撮影)

十一日は日曜日だったが、出勤日となっていたため、装飾古墳館の机に向かい執務についた途端、先生のふ報を告げる電話のベルを聞いた。

当日は日曜日のため、館を訪れる客も多かった。しかし、先生のふ報を受けた途端、過去四十年の思い出と共にいろいろな思いがよぎって、じつと自分の席に座っていることができず館の屋上に上った。つい先ごろまで、照り返しで暑かつた屋上の熱気も和らぎ、そこには初秋があつた。降るような蝉時雨（せみしぐれ）のなか、しばらく屋上から上事中の実習棟をながめ、先生と共にその新設に向けて励んだこの一年間を思つた。秋空の太陽に映えて、昨日張り終わったばかりの金属板の屋根が、きらきらと銀色に輝いていた。先生の生命が、ここにも一つ、確実な形をなして残つたのである。

（平成6年9月一八日付
熊本日日新聞より）

しれないが、一応は記念講演も無事終わり、翌日の早朝、帰途についた。

十一日は日曜日だったが、出勤日となっていたため、装飾古墳館の机に向かい執務についた途端、先生のふ報を告げる電話のベルを聞いた。

原口前館長の遺徳展開催

県立裝飾古墳館で来月3日から

教え子らが準備進める



原口長之の遺徳展の準備に追われる原口さんの
教え子の桑原さん（左）と前田さん



原口長之さん

企画したのは、原口さんの山鹿高（現鹿本高、山鹿市）時代の
教え子で、同古墳館副館長の桑原憲彰さん（五六）と学芸員の前
田軍治さん（五六）。二人は原口さ
んがつくった同高
考古学部に入り、
弁慶が穴古墳（国
指定史跡）や白塚、
馬塚古墳などを発
掘。「装飾古墳館で
も原口先生と一緒に
仕事ができ、喜
んでいた矢先の死、
ショックだった。
巡り合わせで遺徳

熊本史談会の月刊雑誌「石人」を三十五年間欠かさず四百二十号まで出し続けた原口長之・前県立装飾古墳館長（昨年九月に八十一歳で死去、熊本市池田三丁目）の遺徳展が、来月三日から十二月三日まで同古墳館（鹿本郡鹿央町）で開かれる。

開会式には原口さんの妻芳枝さん（八一）も出席予定でいる。展を企画・開催することになった。素晴らしい企画展にしたい」と語る。遺徳展には「石人」四百二十巻をすべてそろえ、山鹿市立博物館長時代の活躍などを紹介。愛用の帽子、発掘調査の七つ道具、弁慶が穴古墳などの出土品を展示する。西日本新聞「九州楽・九州学」に五年暮れ十六回連載した「よみがえる装飾古墳」の記事も展示する。

開会式には原口さんの妻芳枝さん（八一）も出席予定でいる。

編集後記

今秋、先生の一周年を迎えた。月日のたつのは早いもので、以前から、どの様な形での展示が一番先生の御人柄と功績を理解していただけるだろうかと関係者で構想を練っていたが、

当館の後期企画展「原口長之先生遺徳展」については、以開催期日が迫り何時しか時間切れになってしまった。

このため、心ならずもこのような形での展示になってしまったが、生前の先生の人となり、そして功績の一端を御理解頂ければ幸いである。

（桑原・前田）

原口長之先生遺徳展

—企画展示図録—

平成七年十一月三日発行

発行集
熊本県立装飾古墳館

〒八六一—〇五

熊本県鹿本郡荒木町大字岩原三〇八五番地

電話 ○九六八一三六一二二五一四
FAX ○九六八一三六一一一一〇

印刷 下田印刷

〒八六〇

熊本市南区本三丁目一—三
電話 ○九六一三六二一七一七一



肥後 古代の森
シンボルマーク

熊本県立 装飾古墳館

〒881-05 熊本県鹿本郡鹿央町岩原3085番地
□0966-36-2151 □0966-36-2120

この電子書籍は、熊本県立裝飾古墳館 企画展図録 第 7 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：原口長之先生遺徳展

発行：熊本県立裝飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話 : 0968-36-2151

URL : <http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日